本美濃紙 / 紙ができるまで

和紙作りの工程は、日本全国で似ています。美濃では、微妙な違いが和紙の耐久性を高めています。和紙は「流し漉き」と呼ばれる漉き技術で作られます。植物繊維、水、そして粘性分散剤の混合物を、目の細かい竹簀の型枠ですくいます。

紙繊維の調整

流し漉きは 3 つの基本動作により構成されています。まず、職人が型枠を懸濁液に浸し、ちょうど竹簀表面を覆えるくらいのパルプをすくった後、素早く余剰分を流します。この型枠をすくっては傾ける作業を化粧水と言い、繊維の膜を一方向に薄く敷くことで、滑らかな表面が形成されます。

繊維の絡み合い

次に、パルプを多めにすくって型枠を前後に揺らし、竹簀全体を覆う縦揺り・横揺りという作業では、長い楮の繊維があらゆる方向に絡み合います。作りたい厚みがでるまで、この動作を数回繰り返します。和紙を作っているほとんどの地域では、この動作を前後方向、つまり身体の方に向かってから離すように往復させて行います。美濃の職人たちは、これを横方向でも行います。こうすることで、より破れにくい和紙ができます。

仕上げ

最後の作業は、払い水です。化粧水のように、この工程ではパルプを素早くすくっては捨てて、繊維を一方向に揃えて和紙の外表面を形成します。漉いた紙は、一枚ずつ丁寧に重ねていきます。これを一晩圧縮して、余分な水分を絞りだした後、一枚ずつ天日で乾燥させます。